

## 李鴻章の「自強」思想

－馮桂芬からの影響を中心にして－

白 春 岩\*

### はじめに

アヘン戦争で敗北を喫した清国は内憂外患の環境に置かれた。60年代に入って以降、中央政府には恭親王、地方には曾国藩、李鴻章、左宗棠などの官僚がおり、国力増強を図るため、西洋技術を導入する運動を行った。いわゆる洋務運動である。洋務派は「自強」をスローガンにし、軍事工業や海軍建設、外交などに取り組んでいた。

李鴻章は中国近代外交のキーパーソンとしてしばしば取り上げられる。彼は1870年に直隸総督北洋大臣の職についてから最晩年まで、中国の近代外交に深く関わっていたからである。従来、先行研究では李の外交政策及び対日観の成り立ちを考える際、彼の外交経験を重視してきた。しかし、彼の周辺にいたブレンたちの動きや考え方も配慮する必要があると感ぜられる。この点に関して、従来、十分論じられることがなかった。例えば、陳敏（2007）は「清朝末の中国外交と李鴻章」の中で「李鴻章の外交知識とシンクタンク」という節で、李のブレンたちを紹介したが、ブレンたちがいかに李の認識に影響を与えたのか、その点に関して

は、分析していない。

そこで、上の一例として、本稿では李のブレンになった人物の一人である馮桂芬を取り上げ、彼の唱えた「自強」思想が李鴻章に及ぼした影響について、分析を試みたい。

### 1 馮桂芬とその代表作

#### 1・1 馮桂芬について

馮桂芬（1809－1874年）は字を林一、号を景亭、鄧尉山人と称した。江蘇省の出身で、1840（道光20）年<sup>(1)</sup>に進士となり、翰林院編修に任ぜられた。1853年、太平天国軍が南京を占領した後、蘇州を守るため、団練（自衛組織）を組織して対抗した。60年、上海に避難し、太平天国軍と戦うため、「会防局」設立（62年1月）を実現し、外国の軍事力（常勝軍）を利用する外交交渉にあたった。それと同時に、曾国藩に援兵を請い、その結果、李鴻章が淮軍を率いて上海に着任することになった。その後、馮は李鴻章の幕僚として種々の献策を行い、洋務を推進した<sup>(2)</sup>。馮は「曾国藩に敬重され、実に同治、光緒両時代の自強思想の先駆者であった」[『現代中国思想家』第1輯:183]と高く評価されている。

\*早稲田大学社会科学総合学術院 助手（博士後期課程4年）

日本では、中国近代思想について論述する場合、概ね馮桂芬の思想に言及する<sup>(3)</sup>。また、馮桂芬を中心とする研究論文もいくつかある。百瀬弘(1940)は馮桂芬の生涯及び著書に関して、詳らかに紹介している。大崎美鈴(1987)は馮の内政改革論と清仏戦争後における変法論との関係进行分析し、馮桂芬の内政改革論は萌芽の変法論であると指摘している<sup>(4)</sup>。しかし、いずれも、彼が李鴻章の外交政策へ与えた影響については述べていない。また、岡本(2011: 77)は「内乱の時代だから、『洋務』のなかでも喫緊に必要なのは、兵器である。軍事にあたる李鴻章は、おそらく馮桂芬の提言をまつまでもなく、洋式武装の利点を十二分に認識して、その普及につとめた」と軍事における馮桂芬の影響を重要視していない。

中国では、馮桂芬を分析する際、中国近代思想史の変遷における彼の位置づけに着目し、考察されている。しかし、彼に対する評価は主に「洋務派」<sup>(5)</sup>、「資産階級改良派」<sup>(6)</sup>、「地主階級改革派から維新派への移行者」<sup>(7)</sup>などと分かれており、未だ統一されていない。

実際には、1862年に李のブレンになった後、彼の唱える「自強」思想は李に影響を与えたと考えられ、近年、その影響を分析する研究が出てきている。例えば、成(2010)が挙げられる<sup>(8)</sup>。しかし、李の「自強」思想における馮の影響に関しては、十分分析されていない<sup>(9)</sup>。

そこで、以上のような研究状況に鑑み、筆者は馮桂芬の代表作『校邠廬抗議』、『顕志堂稿』を参考にし、彼の外交や洋務に関する論述をピックアップする。馮の「自強」思想が、いかに李鴻章に影響を及ぼしたのかについて考察する。

## 1・2 『校邠廬抗議』と『顕志堂稿』

馮は1861年に40篇からなる『校邠廬抗議』を完成した。その内容は、政治、経済、社会、軍事、文化などの分野にわたっている。具体的には「西学を採る議」(採西学議)、「経費を節約する議」(節経費議)、「西洋機械を製する議」(製洋器議)、「よく夷を馭する議」(善馭夷議)などがある。友人たちから出版を勧められたが、馮がその刊行を拒絶したため、公刊は彼の没後である光緒初年<sup>(10)</sup>まで待たなければならなかった。1898(光緒24)年、変法自強運動が盛んに行われた際、光緒帝は内閣に諭し、『校邠廬抗議』を増刷し、各衙門に頒布せよと命じた[『清史列傳』巻64: 孫家鼎傳28]。

一方、『顕志堂稿』は馮桂芬の文集であり、12巻から構成される。馮の死後、彼の長子により刊行された。中には『校邠廬抗議』の一部を含め、書翰、碑文、伝記などが収録されたのであるが、特に李鴻章が執筆した「墓誌銘」、馮が李鴻章、曾國藩へ宛てた書翰が収められた。これらの書翰を読めば、彼がいかに自分の考えを李に伝え、当時の政策に影響を与えたのかが分かってくるだろう<sup>(11)</sup>。

## 2 李鴻章の評価

先行研究では、馮が李のブレンとして上海で活躍した際の功績について、上海方言館の設立と江蘇減賦との二つの事例をしばしば取り上げている<sup>(12)</sup>。前者は外国との交渉において外国語に通じる人材養成の必要性を認識し、その学校設立を実現した事例である。また、後者は江蘇地方の田賦の税率が他の地方より高かったため、その削減を呼びかけ、李の上奏を経

て、朝廷に裁可された事例である。しかし、前掲した事例のほか、李の外交政策にも馮の影響を窺うことができる。まず、李の評価をみてみよう。

太平天国軍を鎮圧するため、李は淮軍を率い、上海に赴いた。到着して早々、1862年6月5日（同治元年5月9日）、李は上奏文を差し出し、馮桂芬（当時は五品銜候補）を自分のところで働かせたいと要請した。『李鴻章全集』にはその上奏文が収録されている。この上奏文で、李は「よく思いを凝らし、卓見を持っており、經世済民の道を研究している」〔『李鴻章全集』第1巻:23-24〕と馮を称賛した。6月16日（5月20日）、李の要請が許可された。実際、この段階では、李の馮への認識は、彼らが同じ時期に翰林院で仕事したときの記憶や伝聞だけによるものだったと考えられよう<sup>(13)</sup>。

3年経った後の1865年9月11日（同治4年7月22日）、李は以下のように上奏文を差し出した。

上海広方言館設立の件、及び江蘇での租税削減を上請した件においては、馮の意見を多数採用した。馮は勉強好きで、考え深い。古今の事柄に精通している。喜んで經世の学を研鑽する。その長所を総じて言うならば、塩税、漕務の仕組みと実際について最も熟知していることである。ただ、主張が徹底し過ぎていて、妥当を欠く場合もあるが、洋務の骨子についても、深く研究している。〔『李鴻章全集』第2巻:180〕

62年の上奏文と比べれば、評価はより全面的かつ詳細であることが分かる。その「洋務の骨

子」については詳らかに説明していないが、李はこの上奏文で、馮が「洋務」に関して博学であることを十分認めたとはいえよう。

1870年4月22日（同治9年3月22日）、湖広総督を担当していた李は、皇帝に上奏文を差し出し、馮に破格の抜擢—三品卿—を与えるようにと推挙した。その理由として、李は以下の点を取り上げている。太平天国軍の鎮圧、上海広方言館の設立、江蘇の租税削減、いずれも馮の補佐を得たのである。また、捻軍（清に反抗した華北の武装勢力）を鎮圧した際、馮は軍事の最前線まで行かなかったが、書簡で李と意見を交わし、軍事に有益な助言をしたと述べた〔『李鴻章全集』第4巻:45〕。しかし、李の推挙はうまく行かず、先例がないとの理由で却下された。その後、直隸総督北洋大臣の職についた李は、1871年1月31日（12月11日）に再び同治帝に上奏し、馮を推挙した。結局、朝廷は馮に三品卿の肩書きを加賞した〔『李鴻章全集』第4巻:231-232〕。これは、李の再三の奏請と深く関連があるとは言えよう。

馮は1874年に死去した。馮を祀る祠堂を建てるため、李は「奏建專祠片」<sup>(14)</sup>を上奏し、それを実現した。さらに墓誌銘<sup>(15)</sup>を自ら執筆したが、この墓誌銘の文中には以下のように書かれている。

君は学問においては、手を付けなかった分野がなく、しかも、その実用を志していた。天下の大計は、一日として君の胸中を占めないことはなかった。

李は馮を絶賛していた。馮は学問においては、科挙で榜眼<sup>(16)</sup>の好成績を取っており、こ

れが李を感服させたことは贅言を要しない。また、実用の学問においても精通しており、李は心から感服していた。なにより、馮の考えが李に大きな感銘を与えており、二人は思想の中に共鳴するところがあったに違いないだろう。

### 3 「自強」思想の提出

近代に入った清国政府は内憂外患に晒された。魏源は『海国図志』で「夷の長技を師として以て夷を制する」と西洋武器を学び、西洋に抵抗しようとする思想を唱えた。

後に、恭親王は1861年1月24日（咸豊10年12月14日）の上奏文で「敵を知り、国境を守る」ため、根本的な策は「自強」であると指摘し『籌弁夷務始末』（咸豊朝）巻72:2700]、さらに「自強の術は、兵の強化を第一とする」と呼びかけた。だが、もっともはやく「自強」論を提言し、詳しく論じたのは、馮の『校邨廬抗議』であると丁偉志・陳崧 [1997: 51] は指摘している。

実際、1861年に完成された『校邨廬抗議』には「自強」の言葉を11箇所も見出すことができる。これらはそれぞれ、「西洋機械を製する議」（制洋器議）と「よく夷を馭する議」（善馭夷議）に論述されているが、以下、この二つの内容に焦点をあて、馮の「自強」思想を考察しよう。

#### 3・1 「西洋機械を製する議」（制洋器議）<sup>(17)</sup>

まず、「地球上の一大国である中国が小夷に制圧される」という不可解な現実に対して問題提起し、その原因は「天の時、地の利、物産」にあらず、「人材」にあると指摘している。解決策としては「自強より優れた方法はない」と「自強」理念を掲げた。

馮は当時の国内の状況を、「聡明で智慧のある人は、すべての時間を文章、楷書などの役に立たないことに費やしている。しかし、その優劣と得失に一定の基準があるわけではない。にもかかわらず、学業をやめない理由は、朝廷がそれを重視しているからである」と批判していた。その解決策として、馮は「その労力の半分を分けて、機械製作や科学研究の道に従事させる。これに優れた者が合格であり、劣った者が不合格である。このように基準をはっきりさせて、さらに文章や楷書の上手な人と同様に賞する。そうすれば、誰が進んでその道に従事しないことがあろうか」と提言した。

また、各通商口で「船砲局」（西洋武器を学ぶ学校）を設置し、内地から人材を集め、西洋人を雇い、西洋の技術を教えること、さらに、その勉強成果を参考にし、科挙と同様な官職を与えることを提案した。

自分の論点を補強するため、馮は日本を取り上げた。「かつて、西洋人は日本の都に押し入り、通商を求めた。日本側はこれを認めた。それからほどなく日本も蒸気船を操縦し、十数回も西洋を遊歴した。各国を訪問し、多くの条約を結んだ。西洋諸国も日本の意中を知り、これを承認した。日本は微々たる小国でありながら、なお奮発して雄国たらんとする。そうであるのに、大国である我が国だけが永久に西洋諸国の侮りに甘んじ、恥を忍んでいくつもりなのか」と述べ、清国の保守的で変革しない現状を批判し、「自強」の喫緊性を呼びかけたのである。この考えは、後に総理衙門の政策作成に大きな影響を与えたと佐々木 [2000: 14]、丁偉志・陳崧 [1997: 54] が指摘している。

### 3・2 「よく夷を馭する議」(善馭夷議)<sup>(18)</sup>

馮はこの一節で、外国人を制御する方法を述べた。

まず、当今、「夷」が「賊」(農民反乱)を上回る主要問題になった原因を述べた。「賊は減ぼすことができるが、夷は減ぼすことができない」と指摘している。「一つの夷は減んでも、百の夷はともには減ばない。一つの夷が減んでも、別の夷が代わって興起するのであり、したがって減ばないのである」と認識していた。それゆえ、「夷を制御する方法を講じなければならない」と主張した。

次に、「夷」は「理」を重んじる。我々も「理」で「夷」を制御すればよい。彼らにおいて、「一国が信を破った場合、百国が一斉に起ってこの国を攻め、信を守るように強制する。したがって、彼らは信を守らざるを得ない」のである。馮ははやくも西洋諸国における条約の強制力を述べているように見える。

さらに、列強間の牽制する力により、平和状態を保つことができるかどうかに関しては、「判断しがたい」と指摘した。馮はクリミア戦争、ナポレオン戦争などを取上げ、列強は勢力が均衡しているため、時には戦い、時には連盟する。その中、「講和が多く、領土の併合が少ない」との現状となっている。それゆえ、中国の領土を狙っているわけではないことが推測できる。英、仏、露、米の四か国は互いに牽制しており、このため、我々にとって、しばらくは無事の状態が保たれる。しかし、我が国が英属植民地とロシアの領地に隣接している点は、憂慮せざるを得ないと警戒している。

以上のように考察し、馮は「自強の政策は、片時も延ばしてはならない」と「自強」の緊迫

性を呼びかけた。

馮はなぜ、このような考えを持つように至ったのか。彼は1828(道光8)年、正誼書院で学問を修めた際、江蘇巡撫林則徐<sup>(19)</sup>に師事した[熊月之2004:45-46]。また、1840(道光20)年まで、彼は科挙試験に参加し続けた。それと同時に、生計のため、何人かの幕僚になり、実務経験を積んだ。さらに、1851(咸豊元)年、父親が亡くなり、「父の喪に服する」(丁憂)ため出身地の江蘇に戻った。その際、魏源と知り合い、親友になった。彼は科挙試験に合格する前、すでに魏源と知り合っていたのである。したがって、馮の考えは林則徐、魏源に影響されたと考えられよう。[熊月之2004:72-73, 丁偉志・陳崧1997:51-52]

## 4 李鴻章への影響

馮は1862年に李のブレンになった。李は彼の著作『校邠廬抗議』を読んだことがあり、また、馮の「自強」思想に多かれ少なかれ影響を受けたと考えられる。実際のところ、馮の「自強」思想はいかに李に影響を与えたのか。以下、四点に分けて検討する。

第一に、人材養成についてみてみよう。前掲のように、馮は「西洋機械を製する議」では人材養成の重要性を述べ、科挙に疑問を投げかけた。一方、李は1864年に総理衙門へ差し出した書翰で以下のように述べた。

私は以下のように考えている。中国は自強を欲すれば、外国の優れた機械を学ぶべきである。外国の優れた機械を学ぶなら、その機械を製造する機械を研究すべき

である。その方法を学びさえすれば、そのすべてに外国の人を雇う必要はない。それら機械を製造する機械、および機械を製造する人を求めるなら、一つの専門科目を設置し、士人をこれに採用するのも一案である。士人が一生それを富貴・功名の近道であると思うようになれば、事業は成就し、技術も精密になり、優秀な人材も集められる。〔『李鴻章全集』第29巻:313〕

李のこの論説は、馮と同じような論調を持っている。李も外国の機械を学ぶ必要性を訴え、新科目の設置と人材養成を呼びかけた。

第二に、外国武器を学ぶことに関して、馮は西洋人を雇い、西洋技術を教授させたいと主張したが、1863年7月4日（同治2年5月19日）、李は部下の潘鼎新に「私が大金を惜しまず、一、二名の西洋人を雇った理由は、我が軍隊の混沌状態を一新することにある」〔『李鴻章全集』第29巻:233〕と西洋技術を取り入れようと決意を表した。具体的に、李は「西洋人数名を雇い、各軍営で教習させ、また外国人職人を募り、香港から大砲を作る器具を調達する」と1863年5月4日（同治2年3月17日）、曾国藩への手紙で、その具体的な行動を報告した〔『李鴻章全集』第29巻:217〕。

第三に、「賊夷」関係についてみてみよう。馮は「夷」は「賊」よりはるかに深刻だと認識し、李も「目前の患いは農民反乱にあるが、永久の患いは西洋にある」と認識している〔『李鴻章全集』29巻:262〕。さらに、1863年4月21日（同治2年3月4日）、李は戸部の羅惇衍に「我々が自強することができれば、外国人は妄りに我が国を狙いはしないだろう。逆にそうできな

ければ、将来の禍は想像もつかないほどのものとなるだろう」と西洋各国の勢力に憂慮し、自強の重要性を語った〔『李鴻章全集』第29巻:212〕。

第四に、日本観に関して、両者とも東洋にある日本の存在に注目した。とくに、日本を手本にし、「自強」政策を進行させようと考えた。前掲したように、馮は西洋武器や蒸気船の製造を呼びかけた際、日本を取り上げた。それから3年後、李も同様の論調で語った。李は1864年、総理衙門への書翰では「中国の士大夫は古典の語句解釈や小さな楷書の練習に明け暮れ、武人には粗放で緻密な思考に欠ける者が多い。その結果、実際の職務は学んできたことと無関係であり、学んだ内容は実際の職務に役立っていない状況となっている」と批判している〔『李鴻章全集』第29巻:313〕。一方で、同じ書翰では日本について以下のように言及した。

かつて英、仏両国は日本を外府（国外にある庫筆者註 以下同）と見なし、思う存分に富を搾り取った。このため、日本の君臣は奮い立ち、宗室（皇室のこと）と大臣の子弟の中から優秀な人を選び、西洋の機械を作る工場へ学びに行かせた。また、機械を作る機械を購入し、日本でも作れるようにした。現在、日本は汽船を操縦することができ、大砲を作ることもできる。（中略）そもそも今日の日本は明代の倭寇であり、地理的には西洋からは遠く、中国により近い。我々が自立できれば、日本は我々に服従して西洋の隙を窺うであろう。しかし、逆に我々が自ら強くならなければ、日本は西洋の悪事を模倣し、西洋人と中国での利益を分割しようとするだろう。日本は海外

の小国でありながら、手遅れになる前に改革を行い、とるべき方法を知っていたのである。したがって、我が中国は窮すれば通ずという道理をよく考え、また大胆に従来のやり方を変えるべきである。〔『李鴻章全集』第29巻:313〕

李は馮と同じように、日本を例として取り上げて論じた。しかし、李鴻章は馮の思想を一步進化させ、自国が自強できるかどうかにより、日本の対応も違ってくると認識したのである。佐々木〔2000: 11〕は「地方にあって最初に日本の自強に注目した官僚は李鴻章である」と李の進歩的な一面を指摘しているが、筆者は馮が李よりもはやく日本に関心を抱き、さらに、李の思想形成に影響を与えたことを補足しておきたい。

## おわりに

本稿は李鴻章に高く評価されたブレンである馮桂芬に焦点をあて、彼の代表作から「自強」思想と関連がある部分をピックアップし、これらが、いかに李鴻章に影響を与えたのかを試論した。彼ら二人の間には、いくつかの点で共通の意識を持っていることが解明された。そこで、本稿の結論を以下のようにまとめることができよう。

第一に、馮桂芬は李鴻章のブレンとして、李の幕府で活躍し、李に高く評価された。馮は蘇州、上海の防備に参加し、西洋武器の強さを自ら体験した。それらの経験は、彼の思想形成の基盤となっていた。また、李鴻章の経験不足をも補足した。

第二に、馮桂芬の「自強」思想は李鴻章に大きな影響を与えたと考える。例えば、自国の落伍と外国技術への認識など、李の考えには馮の影響があると指摘できよう。しいて言えば、李鴻章は馮桂芬の思想を発展させ、さらにそれを現実化したとも言えよう。

第三に、馮桂芬は李よりもはやく日本の動向に注目している。李はそれに継続し、洋務運動を推進した際、終始日本を手本にし、行動を講じたのである。

以上、馮は李のブレンとして、李の外交思想、とりわけ「自強」思想に大きな影響を与えたことを明らかにした。他方、当時多数のブレン（郭嵩燾、丁日昌など）が李の周囲で活躍していたため、李は馮以外の人物にも影響を受けたことはいうまでもない。それらについては、稿を譲って論じていきたい。

〔投稿受理日2012.8.24／掲載決定日2013.1.24〕

## 注

- (1) 本稿での日時の表記は西暦を基本とする。また本文の中に出てきた中国語の訳文は筆者の訳したものであり、史料を引用するとき、適宜に句読点をつけた。
- (2) 1864(同治3)年彼は上海から蘇州に戻った。〔馮桂芬評伝〕158頁。
- (3) 小野川秀美『清末政治思想研究』(みすず書房1969)、西順蔵『洋務運動と変法運動』原典中国近代思想史 第2冊(岩波書店1977)、野村浩一ら『新編 原典中国近代思想史』(第1, 2巻 岩波書店2010)などが挙げられる。
- (4) そのほか、工藤早恵「清代中葉期における『説解字篆韻譜』研究について—『四庫全書総目提要』から馮桂芬まで」『比較文化研究』(39 45-52 1998)、夏井春喜「一九世紀中葉蘇州の一租棧における収租情況—同治減租とそれに至る過程」『史学雑誌』(90 (7) 1073-1111 1981 財団法人史学会)がある。
- (5) 王栻「馮桂芬是不是一個具有資産階級民主思想

- 的改良主義者」『南京大学学报』1956年第3期。
- (6) 陳旭麓「論馮桂芬的思想」『學術月刊』1962年第3期。
- (7) 劉妍「從『校邠廬抗議』一書論馮桂芬的思想屬性」『牡丹江教育学院学报』2007年第5期。
- (8) 成(2010)は三段階に分けて述べている：①馮桂芬の「乞師書」(援軍を求める書)は李鴻章の上海派遣、またその洋務思想の誕生、形成により機会を与えた。②馮桂芬の著作『校邠廬抗議』は、李鴻章による上海方言館の設立など洋務実践運動に大きな影響を与えた。③馮桂芬は蘇州の税金削減を呼びかけ、李の協力を得て、それが実現することにより、地方官吏の管理、階級矛盾の緩和に大きな貢献をした。「論馮桂芬對李鴻章的影響」『貴州文史叢刊』2010年第3期。
- (9) その他、周輔成(1958)は「馮桂芬的思想」で馮桂芬の「自強」思想に言及したが、李への影響については述べていない。
- (10) その刊本には光緒初年校邠廬初刊本及び光緒18年蘇州の潘氏校刊本・武昌經心精舍重刻本等がある[百瀬弘1940:111]。本稿は光緒24年武昌經心精舍版を参考にする。
- (11) 『顯志堂稿』第5巻に「公啓會協揆」「啓李宮保論減賦」「再啓李宮保」「三啓李宮保」「啓肅毅伯李公論清丈書」「与曾揆帥書」「致李伯相書」などがある。
- (12) 百瀬(1940:106)、成(2010)などが挙げられる。
- (13) 馮桂芬は1840年から1850年までの間、7年間翰林院で勤めた。李鴻章は1847年から1853年までその職にいた。
- (14) 『顯志堂稿』に収録。崇祀録4-5頁。本稿は光緒二年吳縣馮桂芬刊本を参照した。
- (15) 『顯志堂稿』に収録、また同じ内容は『李鴻章全集』37巻29-31頁にも収録されている。
- (16) 進士試験の二番で、つまり「一甲第二名」で合格した人。ちなみに李鴻章は二甲一三名であった。
- (17) 『校邠廬抗議』(下)4-9頁。
- (18) 『校邠廬抗議』(下)10-12頁。
- (19) 林則徐(1785-1850)清末の政治家。福建省侯官の人。字は少穆。諡は文忠。欽差大臣となり阿片流入の根絶を期したが、阿片戦争の敗北によって失脚した。

## 参考文献

- 大崎美鈴 1987 「馮桂芬の内政改革論と変法論との関係についての一考察」『史窓』(44) 75-82 京都女子大学文学部史学会
- 岡本隆司 2011 『李鴻章—東アジアの近代』 岩波新書
- 王曉波 1978 『現代中国思想家』(第1輯) 巨人出版社
- 野村浩一ほか 2010 『新編原典中国近代思想史1 開国と社会変容』 岩波書店
- 王承仁・劉鉄君 1998 『李鴻章思想体系研究』 武漢大学出版社
- 熊月之 2004 『馮桂芬評伝』中国思想家評伝叢書 南京大学出版社
- 佐々木揚 2000 『清末中国における日本観と西洋観』 東京大学出版会
- 周輔成 1958 「馮桂芬的思想」『中國近代思想史論文集』上海人民出版社
- 成曉軍 2010 「論馮桂芬對李鴻章的影響」『貴州文史叢刊』第3期
- 陳敏 2007 「清朝末の中国外交と李鴻章」『立命館国際研究』20(1) 125-148 立命館大学国際関係学会
- 丁偉志・陳崧 1997 『中西体用之間』中国社会科学出版社
- 百瀬弘 1940 「馮桂芬と其の著述について」『東亞論叢』第二輯 東京文求堂

## 参考史料

- 『校邠廬抗議』馮桂芬 1898 武昌經心精舍重刊本
- 『顯志堂稿』馮桂芬 1877 出版地不明 早稲田大学古書史料庫所蔵
- 『李鴻章全集』国家清史編纂委員会 2008 安徽教育出版社
- 『籌弁夷務始末』(咸豊朝)1979 中華書局